

(シラバス No.20) (研究指導科目)

科目名	博士研究指導Ⅲ 英語名：Directed Study Ⅲ	必修/選択	必修
		単位数	2単位
		担当教員	専任教員

【授業概要】

博士研究指導Ⅲは、学生が教員からの個別指導を受けながら実施していく。具体的には、専門科目や基盤科目の学びと、博士研究指導Ⅰ・Ⅱで得られた成果を踏まえ、理論と実践の往還を実現するべく、実践研究として組み立て、集大成である博士論文を作成する。その際、学生は、単なる実践や単なる理論に留まらず、実践上の経験や知見（実践知）と学術的な理論・概念（理論知）を交流させた論文を作成することが意識できるよう留意し、教員はそのための指導を行っていく。論文として提示する際には、学術的な貢献はもちろんのこと、実践の現場にも伝わり、貢献ができるよう留意する。

この一連の中で、学生は博士論文の草稿を提出、予備審査を受審し、その合格者は、博士論文の原稿を提出し、本審査を受審する。

(△1 今津 孝次郎)

章構成案に従って執筆を進めながら、一方では職業人としての経験に関する「自己省察」をさらに深めるとともに、他方では研究テーマ・目的・方法をいっそう明確化する。さらに独自の「介入参画」方法で得られた量的・質的データを再検討して考察を深め、研究目的に沿った結論を得られているかについて確認しつつ、章構成を修正する。そして、学校教育や教職実践についてオリジナルな解明と問題解決に向けた処方箋が提起できているかどうかを再度点検しながら、博士論文の草稿を完成し、さらに推敲を重ねる。

以上のプロセスで習得した「探究」の姿勢を常に保持し、問題発見、問題解明、問題解決の具体策を職業生活のなかで将来的にも持続していくことを何度も確認する。

(△2 仁平 義明)

博士研究指導Ⅲでは、投稿した論文に対するエディターやレフェリーのコメントにどう対応し、どう改訂をしたらよいか具体的な指導を行うことで、博士論文提出要件になっている複数の論文公刊を促進する。また、発達心理学的視点や認知心理学的視点を加味したことで、それまでに現場になかった新しい有効な視点や解決策を提供できたかを確認しながら博士学位論文の執筆を進める。

さらに、博士論文作成の経験を通じて、①自己の研究だけでなく、広く内外の意義ある研究知見や解決策を現場の状況に合わせて実践に具体化できるとともに、②現場にある無数の新たな解決を待っている問題を研究に落とし込むことができる、「実践現場と研究の双方向的なトランスレータ」としての役割を果たせるようになることが期待される。

(△3 三輪 建二)

専門職としての取り組みをもとに、教育実践を省察的に探究することや、生涯学習・職能開発の観点から焦点化したテーマについて、博士論文の執筆を行う。核となる1つの論文または複数の「個別論文」を土台に、①実践の省察の考え方にに基づきながら、研究テーマ・目的、研究法、調査等の研究の実施・分析、考察、成果と課題などの項目を吟味・省察して博士論文にまとめる。特に、②「考察」と「成果と課題」では論文のオリジナリティとして、一般化や汎用性のみならず、専門職である自身と他者にとって実存的、省察的な考察や成果・課題となるよう共同探究を行う。

(△4 三田地 真実)

理論と実践の往還を実現できる教育実践の研究者として、以下の点に取り組む。

①昨年度までの研究の結果を踏まえて、自らが立案した研究計画（単一事例実験計画、複線経路等至性アプローチのいずれか、あるいは両方を用いる）を改訂し、教育現場において再度実施して、改善について検証する。

②今後の教育実践研究にどのように役立つのかについて、これまでの複数の実施を踏まえて考察した

うえで、最終的な博士論文を作成する。

そのために、博士研究指導Ⅲでは、研究結果を踏まえて実践を改善するプロセス、その結果を査読論文や博士論文として執筆するプロセス、その執筆過程でのコメントへの対応について指導する。

(△5) 細田 満和子

1年次、2年次に修得した知識や技能や態度を基に、各自の教育・医療・福祉の連携論に関するテーマや病に関する社会学（医療社会学）的考察のテーマにふさわしい理論的枠組みを同定し、先行研究のレビューをし、フィールド調査に基づく結果をまとめて博士論文を仕上げていくための教育支援を行う。その際、自身の博士論文が現場の課題を解決し共生を目指す社会に導くいかなる貢献となるのかについて、常に考えるように促す。博士研究指導Ⅱに続いて関連学会への参加や学術雑誌への投稿を目指す指導や、修了後も実践的研究を継続できるための指導を行う。

(△6) 児玉 ゆう子

看護教育学、看護教育の実践に関するテーマを中心とした博士論文の草稿を作成し予備審査を経て博士論文執筆を行う。看護教育の実践を支える研究であることを考え方の基盤にし、目的、方法、結果、考察等の項目を吟味し、複数の個別論文を土台として、博士論文にまとめる。博士研究指導Ⅱまでで実施した調査研究の成果を踏まえつつ、実践について実証的な論文となるよう執筆を行う。

論文のオリジナリティのみならず、特に看護教育の実践や看護という専門職の発展、医療専門職の教育の実践や各専門職の発展につながる研究となることを目指す。

(△7) 石原 朗子

本博士研究指導Ⅲでは、博士研究指導Ⅱにおいて実践した調査研究の結果について、その知見を整理し、博士論文としてまとめていく。その過程では、結果からオリジナリティある結論をまとめることを指導するだけでなく、実践に活かせる考察となるよう考察を重ねるべく、博士研究指導Ⅰ・Ⅱでまとめた成果を再度振り返り、全体の構想に合わせた修正も行っていく。これらを実践していくために、教員とのディスカッション、発表会や審査会での質疑のフォローアップを重視する。博士論文全体では、結果や考察を学術研究として示すことはもちろんのこと、一般化の過程を踏まえつつ、その成果が高等教育の指導場面やプログラム設計の場面等で他者の実践、学問に生きるような結論となる知見、提言を行う。

【キーワード】

実践と理論の往還、現場に活かせる研究の考察と結論の提示、実践現場と学術への貢献、博士論文執筆、予備審査、本審査

【授業の到達目標】

本科目の合格は、博士論文の予備審査後に実施される本審査の合格をもってなされる。本審査は、博士論文の審査基準に則って行われる。

学年を通じて以下の点を求める。

1. 実践と理論の往還を実現するべく、結果に関して現場に活かせるような考察・結論・提言の検討を行う。
2. 個人から社会システムまでの広い視野を持って博士論文を執筆していく。
3. 博士論文の執筆を行いながら、その成果を現場に還元していくことを目指す。

学年末の時点で以下の点を求める。

4. 博士論文を提示する中で、実践現場と学術界の両方への貢献を行うことができる。
5. 博士論文の審査基準に沿った博士論文を提出し、実践と理論の往還について論文内に示すとともに、プレゼンテーションを通じて情報発信ができる。
6. 修了後に、研究成果自身を現場に還元していき、研究で身につけた諸能力を実践現場で活用していける力を持つ。

【教育の方法】

スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】

【授業計画】

本科目は、教員の個別指導と学生の成果発表、それに合わせた事前・事後の学修からなる。

1) 第一段階

学生は、年度初期の研究発表会で、自身の研究の結果の考察について発表し、また後進への助言を行う。その後、研究発表会での指摘も踏まえて、論文草稿を修正し、予備審査に挑む。予備審査の準備段階の指導では、①理論と実践の往還を実現した内容となっているか、②個人から社会システムまでを含む包括的な視点で考えているかについて論文指導を行い、合わせて、研究内容を実践現場の人間にもわかりやすく伝えるためのプレゼンテーションや言葉選びの工夫についても指導していく。

2) 第二段階

第一段階を経て、予備審査に合格した学生は、さらに精緻化した論文の原稿を作成する。教員は、予備審査の指導で留意した点のうち、学生が不十分である点を中心に、指導を行っていく。その上で、学生は本審査を受ける。

3) 第三段階

本審査合格後には、修了後の論文公表と、合格後の公開発表会に向けた準備を行う。教員は、学生が実践現場や異分野の人にも伝わる発表ができるよう、さらに指導を行っていく。その際、教員は、多様な発表機会や、研究で得らえた知見を活かす機会を学生とともに模索していく。

【履修にあたっての準備・履修上の注意点】

本科目の履修にあたっては、博士研究指導Ⅰ・Ⅱの中で一定の実践を行い、成果を課題研究等でまとめていることが求められる。

【スクーリングでの学修内容】

研究指導教員と学生の合意形成のもと日時を設定し、定期的に研究指導を行う。個別指導にあたっては、学生は事前にその時点での課題を整理したうえで指導を受け、指導後は、指導の中で学んだことの報告を行うこととする。

また、年度に2回、研究発表会を実施する。1回目では発表と後進への助言、2回目は後進への助言をすることを原則とする。発表にあたっては、事前学修としてプレゼンテーションや予稿の準備を行い、事後には、他者の発表から学んだ内容についての振り返りを行い、それを通して自身の実践や研究にどう生かせるかを考え、合わせて自身の発表に関して指摘された点のまとめと振り返りを行い、予備審査に向けた準備に活かす。

その後は、予備審査と本審査に向けた個別指導を中心にスクーリングを受けていく。

【評価方法】

博士論文予備審査・本審査におけるプレゼンテーション、提出された論文、口述試験について、博士論文の審査の観点に基づいたルーブリックを基に評価を行う。

【テキスト】

授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する

【参考図書】

授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する